

葬祭班概要

山田 慎也

葬祭班の初年度の報告についてそれぞれ概要を述べていきたい。

山田慎也「写真というメディアと死者の追悼 —『明譽眞月大姉葬儀写真帖』を事例として」では、遺影などの写真メディアは死者儀礼において重要な位置を占めており、こうした写真の利用について、近代に流行した葬儀写真集に着目し、葬儀記録写真の機能を検討している。そこでは蓮華の造花など圧倒的な量の供物と、その贈主である魚河岸の間屋や多くの名だたる歌舞伎役者などのものを連続して掲載することで葬儀の偉容を示し、また詞書きにより現世の成功と来世の菩提といった二世の安楽を願ったことで、故人の追悼を写真集という形で作り上げている様相を分析し指摘する。

大場あや「メディアとしての冠婚葬祭作法書の作られ方 —長野県の事例」では、作法書の制作について作り手の側からみていくことで、冠婚葬祭の現状を分析するものである。現在、地域別の作法書が多く作られ、その大部分を占めるのが地方新聞社の編集発行したものである。これは新聞社が、地元の協賛企業を集め編集者をきめて制作するなど、進行管理や監修に近い立場に関わることから、マスメディアとしての特質を生かした制作の仕方であることが明らかとなった。また参列者や喪主双方の立場の情報や終活に関する情報の増加など、求められる情報が変わりつつあり、書籍という紙媒体からウェブメディアへの連動など、メディアの広がりもあることも示されている。

大道晴香「メディアの中の葬送 —葬儀をめぐる報道の変遷について（第1年次報告）」では、マスメディアを通して葬儀がどのように表象されてきたか通時的に検討してゆくための指針を示している。そこでは、現代の葬儀の有り様がどのようにメディアにおいて表象されているのかといった観点だけでなく、儀礼自体がメディア的機能を果たし、故人に関わる人間関係や事物など、メッセージの媒介ともなっている点に注目している。そして葬送対象である故人と立場、記事の焦点となる人物が故人かその他の生者か、そしてその内容も故人の物か生者かといった観点を設定し、具体的に検討している。

田中大介「価値を伝える —葬儀業における広告の利用と展開」では、葬儀業における広告の特質に注目し、広告において葬儀サービスの商品価値や葬儀業の企業価値の伝え方やその効果について検討を行っている。そこでは、業務内容に関する社会の忌避的な視線から、どのようにそれを乗り越え、サービスや企業価値を伝えていくのかについて分析している。それで援用される俳句の投句や天使という表現、顧客の姿など、メディア表現の創造的な工夫を指摘し、葬儀業ならではの価値の伝達の特徴を析出している。

瓜生大輔「台湾・新北市の葬祭施設管理システムとオンラインメモリアル」では、台湾のオンラインメモリアルについて検討している。台湾では公的なオンラインメモリアルシス

テムが構築され、新型コロナウイルス感染症流行時に利用が拡大、さらに発展していったという。台湾新北市では、市内の葬祭施設を墓、納骨堂、儀礼堂、葬儀場、火葬場に分類し統合的に管理システムを構築していく中で、さまざまなオンラインメモリアルのが作り出され、とくにコロナ禍では利用が進んでいったという。そして清明節など墓参で混雑する際にオンラインシステムが活用されるなど、包括的な葬儀サービス管理システムの一環として、オンラインメモリアルが作られていったことが明らかとなった。

小谷みどり「メディアや SNS における遺体 —アジアを中心に」では、日本のメディアでは遺体写真は掲載されないが、これは世界的に見れば一般的なことなく、なぜこうしたタブーが生まれるのかに疑問を持ち、その疑問の前提となった東南アジアにおける遺体表現の実態を提示する。タイでは、テレビや週刊誌などで事故の遺体等をそのまま掲載しているだけでなく、博物館などでもミイラ化、標本化された遺体を数多く展示している。さらにカンボジアでは、SNS で一般の人々が葬儀過程で遺体を写したり、また故人の写真を貼った人形を葬儀会場に設置したりと、メディアにおける遺体表象は顕著であることを指摘しつつ、日本のタブー視について今後検討していくという。

宮澤安紀「葬儀業界が作る博物館 —National Funeral Museum UK（ロンドン）と Museum für Sepulkralkultur（カッセル）から」では、イギリスとドイツの葬送文化博物館についての調査報告である。日本では葬儀の展示はあるもののそれを専門とした博物館はない。一方で国外ではそのような博物館がいくつもみられる。そこで葬儀社の経営する National Funeral Museum UK と、葬儀に関する業者や自治体、宗教者、研究者の連合団体が運営する Museum für Sepulkralkultur など、運営主体の特質を示し、そこでの学芸員や研究員の関与の仕方、展示の目的などの課題を提示する。そして博物館が死の文化とそれを職業とする人々の社会的意義について、理解を広めようとしていると指摘する。

以上のように、今年度は研究の着手段階ではあるが多様な課題が見られる点では、かなり興味深く、今後のさらなる展開を期待したい。